

津波てんでんこ

—「東日本大震災」被災地への
歯科医療支援に参加して—

稲川 憲弘



(いながわ・のりひろ)
歯科医師
ICDフェロー

メディアでも報道されておりますが、東日本大震災への支援活動は長期化すると考えられます。

当クリニックでは、2011年4月30日・5月1日と2日間歯科医療支援に宮城県石巻市東松島市へ衛生士3名・助手1名と私で参加してきました。

当時の被災地の多くは、歯科医療従事者が日々支援体制を整えつつあるという段階でした。

被災地の周りではすでに診療を再開した歯科医療機関もみうけられ、これからの支援活動を進める上でも歯科医院の復興を考える上でも地元の歯科医師・組織との連携がとても大切でした。

支援に入る我々の心構えとして「お手伝いをさせていただく」という気持ちが重要でした。

被災地の歯科医療を支える担い手の中心は、地元の歯科医師です。私達は被災者の方々の口腔内疾患の応急処置や要介護者の口腔ケアを行い、同行した地元の歯科医師へ繋ぐという事でした。

何チームかに分かれ、私たちが歯科支援をおこなった場所は石巻市の中でも、最大級の避難所「ビックバン」(河北総合支所センター/石巻市成田)という所で、歯科診療のために2階の1部屋を提供していただきました。

避難所の掲示版で告知はされていたのですが、その部屋で私たちが待っていても患者さんは診療にはまったく来てはくれません。

私がまず行った事は診察ではなく、時折自衛隊トラックが避難所の玄関に到着するとそこに居る男性達が一斉に玄関まで出向き、積んであった支援物資を手渡し搬送で避難所の倉庫に運ぶ作業をしている方達の列にまじり、お手伝いをしていました。





そのお手伝いを繰り返しているうちに、やっとうちとけていき話しができる様になり、歯で困っている人を紹介していただける事ができました。

歯科衛生士や助手は、1階の居住・共用スペースを回って希望者を探し出してお連れしなくては患者さんがやって来てはくれない状況でした。

また、ボランティアで来ている看護師さんや介護福祉士さんの情報がとてもありがたかったです。

エレベーターがあるにも関わらず2階までは行きたくない・足が不自由で行けないという方々もあり、その様な方々にはすぐにこちらから出向き診察していきしました。フットワークの軽さがとても大切でした。

実際診察を行ってみての私の感想は、歯科医療支援活動はまさしく訪問診療の様でした。

私のクリニックでは以前より訪問歯科診療を行っていることもあり、いつも使用してる訪問歯科診療用器具をコンパクトにまとめたセット類を避難所に持ち込み、威力を発揮しました。

それと、やはり子供達の口腔内はスナック菓子やジュース漬けになっていました。支援物資の食糧配給

の中での食事なので偏ってしまっていたり、心身的ストレスや毎食後歯磨きをしない状態が原因だと思われますが、食育・口腔衛生とうたわれる現代社会でう蝕や口腔状態の悪化がこれほどまでに進んでしまうのかと愕然とさせられました。

今回、石巻市東松島市のあちらこちらで「津波てんでんこ」という言葉をよく耳にしました。

これは「津波が来たら、家族1人1人で てんてんてんてんに逃げろ」という意味。

何ともつらく厳しく感じますが、一方で互いに信頼し合っているからこそみなそれぞれが必死で逃げているのだと信じ、とにかく自分の身を守って避難するという強い絆にも裏づけられている様に感じました。

津波で、家族を助けたい一心で迎えに戻りどれだけの方が流されてしまい被害にあったのか。

その意味を聞いた時、私の目の前にちょうど瓦礫の山があったのもあり、何とも言えない感情がこみあげ大変切なく胸が絞めつけられる想いで目頭が熱くなりました。

思えばこの1年あまり、日本は必死でした。